2026年度

# 「忘れられない看護エピソード」

～いのち・暮らし・尊厳を まもり、支えるプロフェッショナル～

5月12日は
看護の日

一歩踏み出せば、未来は動く。
看護を目指すあなたの可能性を、
広げる、高める。

KANGO部!

生きるを、ともに、つくる。
公益社団法人 日本看護協会

# はじめに

5月12日は「看護の日」です。
毎年、この日を中心に、厚生労働省と日本看護協会は
「看護の心をみんなの心に」をメインテーマとして、
全国各地でさまざまな事業を行っています。

「看護の日・看護週間」事業で行ってきた
「忘れられない看護エピソード」募集では
「いのち・暮らし・尊厳を まもり、支えるプロフェッショナル」と題し、
現場で働く看護職の皆さまから日々実践している
看護のプロフェッショナルとしての専門性や魅力を、
次世代を担う若い方々に伝えるエピソードを募集しました。
ご応募いただきましたたくさんのエピソードの中から、
受賞した3作品をご紹介いたします。

看護にまつわるエピソードが、
若い方々に看護の魅力を伝え、
将来、看護の道を目指すきっかけとなれば幸いです。

公益社団法人 日本看護協会

## 最優秀賞作品「その言葉は、誰のため？」アニメーション・漫画 公開のお知らせ

最優秀賞に選ばれた作品「その言葉は、誰のため？」がアニメーション・漫画化されました！ 作品は、右記QRコードの日本看護協会ホームページよりご覧いただけます。

日本看護協会
ホームページ

# 「靴を履かせる看護」

受賞者：若杉 英典 さん

じん肺の末期で入院していた90歳の男性。呼吸困難が進行し、酸素投与が欠かせない状態で、言葉も少なかった。夜勤で初めて受け持った夜、彼はかすれた声で言った。

「死ぬ前に、もう一回、靴を履きたいんや」

突然の願いに戸惑いながらも、ご家族に話を聞くと、彼は長年建設現場で働いてきた職人だったという。毎朝、作業靴を履き、誰よりも早く現場に立つのが誇りだった。「病人ではなく、職人として最期を迎えたい」そう語るような眼差しを彼はしていた。

病状は進行しており、起き上がるのも困難。医師からは「無理をさせないように」と指示があったが、私は悩んだ。このままベッド上で最期を迎えるより、〝らしい姿〟で旅立てる方法があるのではないかと。

私は医師に相談し、多職種と連携しながら慎重に準備を進めた。酸素ボンベを用意し、看護師2人で身体を支え、ゆっくりと車椅子に移乗。ご家族が持ってきてくれた古びた作業靴を手に取った。

「よし、履くか」

彼は小さな声でそう言い、自分の足を動かした。足が靴に収まった瞬間、彼の背筋がピンと伸びた。まるで、現場へ向かう朝のようだった。

数日後、彼は家族に見まもられながら静かに息を引き取った。

後日、ご家族が病棟を訪れ、私にこう言った。

「父の〝らしい姿〟を見せてくれてありがとう。あの靴を履いた姿は、父の人生そのものでした」

いのちを長らえるだけが看護ではない。〝その人らしく生きる〟ことを支えるのも看護の力。あの日の靴は、彼の人生と誇りをもう一度取り戻すための一足だった。

そしてそれは、私にとっても忘れられない〝看護師としての原点〟となった。

# 「看護師としての財産」

受賞者：齋藤 芳理子 さん

看護師5年目の夏。私は回復期病棟で、一人の患者Sさんと出会った。

心原性脳梗塞で倒れ、言葉も体もままならず、ベッド上で奇声を上げる日々。リハビリにも消極的で、心を閉ざしていた。しかし、言語聴覚士が介入するリハビリの時間だけは違ってSさんには強い意思があった。

「口から、食べたい」

失語があるため、ジェスチャーだが何度も口を指さして訴える。実は、食べ歩きが趣味だったと伺った。

Sさんは、毎週同居の息子さんとおいしいものを探してよく出かけていたのだ。

「Sにとって、口から食べることは生きる喜びそのものだったのだと思う」と息子さんは寂しそうに、私に教えてくれた。私も息子さんも可能なら口から食べてほしいと願った。

しかし、嚥下機能は著しく低下し、とろみをつけたミキサー食を、ベッドを30度に起こしてようやく飲み込める状態。

それでも「椅子に座って食べたい」とSさんは、ベッドから起き上がり訴える。それが、Sさんの願いだ。

「無理です」と言うのは容易だった。

しかし、患者本人の意思を尊重することは、看護の根幹である。Sさんが諦めない以上、私も諦めるわけにはいかなかった。

ご本人、ご家族と繰り返し対話を重ね、多職種で情報を共有し、安全性と可能性を検討しながら取り組んだ。

まずは誤嚥リスクが少なく、咀嚼を必要としない食品を選択した。

卵ボーロ、チョコレート、アイスクリーム。姿勢や一口量を調整し、試行錯誤を重ねるうちに、少しずつ飲み込める事が多くなった。

すると、Sさんの表情に笑顔が戻り、病室の雰囲気も明るくなっていった。

やがて段階的にベッドの角度を上げ、最終的には車椅子での食事が実現した。

自らスプーンを持ち、口に運び、嚥下できた瞬間、私は胸が熱くなった。

さらに固形物も少しずつ食べられるようになり「もう一度、食べる喜びを取り戻せた」と実感されたその姿は、看護師としての大きな財産となった。

# 「その言葉は、誰のため？」

受賞者：岡部 卓也 さん

配属されたばかりの小児病棟。白衣のポケットよりも胸の中に、緊張と不安をぎゅっと詰め込んでいた私は、毎日を失敗と反省の中で過ごしていた。そんな日々の中で出会った、一人の男の子。

彼は5歳。白血病の治療のため、長期入院していた。骨髄穿刺、髄液検査、何度も繰り返される採血。どれも彼にとっては恐怖そのものだった。処置のたび、かすれる声で「こわい、やめて！」と泣き叫ぶ彼に、私はただ必死で声をかけていた。

「すぐ終わるよ、大丈夫だからね」

何度も、何度も。自分自身に言い聞かせるように。

ある日、採血の準備をしていたときのこと。私はいつものように「大丈夫だよ」と声をかけた。すると彼は、涙をたたえた瞳で言った。

「大丈夫って、何が？」

その瞬間、言葉が喉の奥で凍りついた。「大丈夫」という言葉が、彼には〝分かってもらえない〟証しのように響いていたのだ。

たとえ5歳でも、彼は自分の身体の異変や恐怖を、きちんと感じ取り、理解していた。私はその日を境に、彼との関わり方を見直した。

処置の前には「何をするのか」「なぜ必要か」「どのくらい痛むか」を、子どもにも伝わる言葉で丁寧に説明するようにした。そして、「どっちの手にする？」「この絵本を読んでからにしようか？」と、小さな〝選べること〟を意識して増やしていった。

自分で選び、乗り越えた体験は、彼にとって「安心」と「自信」につながっていったのだと思う。

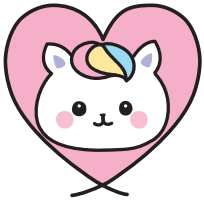
退院の日、彼は私の手をぎゅっと握りしめて言った。

「もう、だいじょうぶだよね」

その笑顔は、今でも忘れられない。ようやく、あの言葉が彼にとって「本当に安心できる言葉」になったと感じた。私は彼から〝言葉の重み〟を教わったのだ。

看護とは、ただ処置をするだけの仕事ではない。目の前の人の感情に寄り添い、その「人生」に触れていく営みだ。治療の影にある小さな叫びや葛藤に気づき、向き合うこと—それこそが、看護の本質だと、彼が教えてくれた。

5月12日は



看護の日

https://www.nurse.or.jp/aim/

看護の日

[主催]厚生労働省／日本看護協会

[後援] 文部科学省／日本医師会／日本歯科医師会／日本薬剤師会／全国社会福祉協議会／日本病院会／全日本病院協会／日本医療法人協会／日本精神科病院協会／全国自治体病院協議会／日本助産師会／日本精神科看護協会／日本訪問看護財団／全国訪問看護事業協会／全国老人保健施設協会／全国老人福祉施設協議会／日本労働組合総連合会／ささえあい医療人権センターCOML

[協賛] テルモ(株)／東洋羽毛工業(株)／ナガイレーベン(株)／パラマウントベッドホールディングス(株)